

地理学談話会会報

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部地理学教室内

地理学談話会

教室の近況報告

——ごあいさつにかえて——

残暑お見舞申上げます。会員各位にはますます御壮健の御事と存じ上げます。

さて、一昨年の昭和三十一年の秋に、京都大学文学部が創立五十周年の記念祝典を挙げましたことは、会員各位も未だ御記憶に新たなことと存じます。わが地理学教室の歴史は、文学部そのものの歴史と同様に極めて古く、学部創設の翌年、明治四十年に小川、石橋両先生によって全国にさきかけて講座の開設をみました。それ故に、実は昨年は、教室の五十周年であったわけです。この五十年間において、わが地理学教室が日本の地理学界のために多大の貢献をなしてきたことは、ここに改めて述べるまでもないと存じます。

地理学談話会も、例年かかさず研究発表会や懇親会を行い、

老壮若年をとりまぜた多くの会員の御参加をみて、盛大に行われてきました。その都度、会員諸賢の動静や、教室の近況などのニュースは、互いに認識を新たにできたわけですが、このたび試みに、ささやかな「談話会会報」をお届けすることにしました。終戦後二、三度、名簿を発行してきたこともありすが、その後資金のやりくりが思うにまかせず、また幸い文学部の同窓会「以文会」が隔年に名簿を発行していますので、談話会名簿も不急と考えて今のところ手控えております。この会報を名簿にかわるものとおとり下されば幸甚です。

終りに、会員各位の御発展をお祈りし、御機会があれば教室を時々訪れて下さるよう、またこの会報にニュースをお寄せ下さるよう希望いたします。

小牧實繁先生還暦記念

についてお知らせ

今秋十一月祝賀会開催の予定

同封の趣意書のとおり、小牧實繁先生は今秋還暦を迎えられることとなりました。

ついでには私どもとしても、心からお祝申上げたいと存じます。そこで来る十一月二日の談話会懇親会において記念品贈呈をかねて祝賀の会を開く予定であります。なお祝賀会につきましては後日改めて御案内申し上げます。

談話会大会研究発表の中止について

本年度は人文地理学会創立十周年にあたり、同学会の記念大会が十一月三・四日にわたって行われ、つづく五・六両日も若狭・名古屋両方面へエクスカーションが行われます。そのため談話会大会の研究発表は日程が思うにまかせず、本年度は取止めさせていただきます。

ただ、上記のごとく二日夜には小牧實繁先生還暦記念祝賀会をかねた談話会懇親会が開かれ、また四日には人文地理学会のシンポジウムが行われます。ふるって御参加下さいませよう、御通知致します。

昭和三十三年地理学関係

講義題目

教養部

〔講義〕

人文地理学Ⅰ

人文地理学Ⅱ

人文地理学Ⅲ

Ⅰは概論 Ⅱは地誌 Ⅲは特論

藤岡教授・水津講師

西村助教授

日比野助教授

織田教授・本岡助教授

文学部

〔講義〕

地理学序説

乾燥地帯と牧畜(共通)

生産地域

中国歴史地理(共通)

自然地理学

近代地理学史の諸問題

*体質人類学(共通)

**文化人類学序説(共通)

産業革命期における工業地理

〔演習〕

人文地理学の諸問題

〔講義〕

独書講読

仏書講読

英書講読

〔実習〕

地図学

大学院

〔研究〕文学部の項に(共通)として併記

〔演習〕

E. H. Warrington: Greek Geography 織田教授

中国農業地理 森教授

立地論に関する演習 西村助教授

*考古学と共通 **社会学・考古学と共通

藤田元春先生のことども

織田 武雄

この三月、今年の地理専攻生の卒業論文発表会を兼ねて地理学談話会が開催されたが、久しぶりに藤田先生も御出席になり先生を中心としてまことに談論風発の盛会であった。それから一カ月もたないうちに、先生の御急逝にあい、あの御元氣な先生の御聲に再び接することができなくなったことは、われわれには今なお信じがたい思いがする。

先生は七十九歳の御高齢に達しておられ、日本の地理学界の文字通り最長老であつたばかりでなく、鑒鑒として若い者に伍しつつ、つねに第一線に立って研究を進められた。またそのため、立命館大学の野間教授を中心にしてわれわれが作っている『民家』の研究会の見学にも、先生は眼や足が多少御不自由なものにも拘らず、バスに同乗されて終日われわれのために御指導の勞を厭われなかつたほどである。それは先生の稀な御健康にもよることながら、さらに先生の学問に対する比類なき精力と旺盛な向学心によるものであつた。

先生の少年時代は必ずしも物質面には恵まれなかつた。そのため師範学校を卒業してから、独学を重ねて日本史・西洋史・東洋史・西洋史・地理の中等教員免許状を獲得されたばかりでなく、齡不惑に近くなつて、京都大学史学科地理教室に選科生として御入学、さらに当時試験のうちでも最難関とされた高等学校卒業検定試験にも合格されて、本科生として大学を卒業されたのであつた。大学に在学中は、小川琢治先生や内藤湖南先生などに多大の薫陶を受けられ、また藤田先生自身の地理や歴史に対する深い御造詣と日本や中国の古典に関する広い御教養を基礎として、日本の地理学界に、日本および中国の歴史や地理学や地理学史の新しい分野を開拓された。先生の地理学に関する著書だけでも二十冊以上、論文に至つては実に百篇に達するほどであるが、『尺度綜考』『日本地理学史』『日本民家史』『平安京変遷史』『日支交通の研究』など、いずれも不朽の名著である。

このように藤田先生はまことに苦学力行をもつてきびしい学

問の道を切りひらかれていたのであるが、独学の人にはしばしばみられるような、狷介な面は先生には全くみられなかつた。まことに先生は天性溫落、天衣無縫の御風格を持つておられた。したがって、先生得意の漫談は、ユーモアを交えた楽しいものであり、警句が相次いで出で、相当際どい話でも洒落然と少しも厭味がなかつた。また先生はなかなか毒舌家であり、われわれも幾度となく「あほなこと言ふな」「あほな奴じゃ」と例の口調で叱られたが、先生にどんなにたしなめられても怒るものではなく、それでいていつも何か身にしみる思いがした。

また先生はまことに情の人であつた。明治三十八年御結婚以來、先生の最も好き伴侶として、また最も優れた学問の助手として内助の功を擧げられた起奴子夫人が、昭和七年の暮、先生の『日本地理学史』の完成後、間もなく永眠された時、先生は夫人の柩の前で、人目もはばからず男泣きに泣かれたということである。また私事にわたるけれども、私の両親が戦災で亡くなった時も、先生は疎開先の丹波の鶴岡から、わざわざ私の家まで弔慰にお越し下さつたが、郷里の山野で、蕨を採り、芹を摘まれている先生のささくれだつた手がいたましかつたことを覚えてゐる。

先生の想い出は書き綴れば限りがないが、先生は日本の地理学界を代表する最もすぐれた地理学者であつたばかりでなく、われわれにとってまた真の教育者であつた。あらゆる苦闘を続けながら学問を進めて来られた先生の人生觀と高邁な精神、そしてその中にいつも含まれた涙と笑とは、われわれにとって不断的の教訓である。

増田忠雄君の思い出

太田 喜久雄

同期生八名、教室創設以來の大量卒業で、質の程はと野次られながら、我々は意氣軒昂、押出された恰好だが、既に故人が二名、而も何れも戦争犠牲者というわけである。

増田君は二高の理科出身、なかなかの文科的の人で、同期の悪童が散々怠けている間にも、さつさと美学の講義に出たり、

浜田さん、梅原さんの考古学に熱中したり、南座の顔見世興行にはよくクラス会を提唱して見物に出掛けたものだ。南紀州、南四国の演習旅行に相当な古代集落の蘊蓄を傾けて、助手の吉田(敬市)さん等を大いに悩ましたこと等懐しい思い出となっている。卒業後も彦根時代はクラス会には欠かさず出席し、おでん屋にくだを巻き、当時一円五十銭(但し一升)のオミキに快気焰を挙げ、何時も終列車を気にしながら帰つて行つた。同君の結婚は同期では在学中既に家庭を持っていた滝本君を除いては一番早く、京都ホテルの披露宴には、我々は借物のモーニングを着て及んで列席し、何か勝手なことをてんでにおしやべりしたように記憶している。

同君の満鉄赴任後は、私は又同僚ともなつたが、昭和十四年秋、出向先の興亜院の命で満支へ出掛けた際、一夜大連の御宅へ泊めて頂き、翌朝満鉄自慢の急行「アジア」で新京へ立った。当時幼かつたお子さんがそれぞれもう大学を出て就職しておられる。昭和十七、八年頃お母様の法事に上京した同君と時既に戦争酣となつてオミキの欠乏した時分、無理に探した銀座裏の小亭で大いに国家社会を論じ合つたのが最後、その後戦争は熾烈を極め、お互いの音信は絶えたが、終戦直前、応召して奉天市内を行進中のゴボウ剣姿の同君を見掛けたと会社の同僚から伝え聞いた。終戦と共に満鉄は解散され、同君を始め殆んど知人の消息を聞く由もなかつた。永年調査部で、ソ満国境問題の研究に没頭したので、恐らくはソ連へ拉致されたのじゃないかと心痛の種であり、只無事を祈つたのであつた。たまたま昭和廿七年春、現在関係の深い協和銀行の吉村(駿太郎)さんが麻布中学時代の親友であり、家庭的にも親交のあることを聞き奇縁に驚くと共に、同氏から同君の御家族が戦後苦勞を重ねて満洲から引揚げて来られたこと、同君が恐らくはソ連へ連行されて消息を絶つたこと等を聞かされた。不幸にして私の杞憂の適中を悲しみながら、尚ひよつこり帰つて来るのじゃないかと一縷の望みを御家族の人達と共に掛けていたのであつた。ソ連における戦病死の公報に接し、万事休す、これから大いに働いて貰わねばならない時に、遺憾とも残念とも申し様がなく、今はただ君の冥福と御遺族の御多幸を祈るのみである。

増田忠雄氏を悼む

山口平 四郎

終戦の年の五月、満洲の穆稜連隊に応召され、戦後消息の不明だった満鉄調査部調査役増田忠雄氏の戦病死が確認されたのは、やっと今春のこと、昭和二十二年五月二十九日にソ連ウズベック社会主義共和国で病歿されたと公報は伝えている。荒涼たるソ連の奥地、誰ひとり知るべのない捕虜収容所で、寂しく世を終えられた増田さんと思うことは堪えがたい悲しみである。私は昭和十七年に渡満して満鉄調査部に勤めて以来、教室で四年先輩に当たる増田さんから御指導を受けることになった。それまでは、地理論叢に発表された業績でお名前を知っていただけの増田さんは、満洲へ来たばかりの私にとって唯一の頼りだった。ところで、同じ室で机を並べて満洲地理の勉強をはじめてみると、学問というものはこうしてやるものか、ということをはじめて私には解りかけてきた。誠実無比な増田さんは毎日朝の出勤時間から夕方の退社時間まで、あるいは図書館や資料室で文献を渉猟し、あるいは机上に地図を拡げて思索し、着

実に一歩ずつ対象の核心に迫って毫も退転されることがなかった。増田さんが黙々と研究されている姿を身近に眺めていた私には、どんな書物からも得がたい地理学研究法が、自然にすこしずつ会得されたのである。四十才で応召されるまでに増田さんは、『満洲国境問題』の名著をはじめ、東亜大陸の貴重な研究を多く遺されたが、その真摯な学風に幾分なりと感化されたことは私にとって大きなしあわせであった。真面目な学者だった増田さんは、また心の温かい先輩でもあった。配給時代で酒びでりをかこっていた私は、いつも大連桃源台のお宅へ招かれ、増田家の貴重な配給酒を横取りしてしまふのだった。僕はお酒の味は大好きだが盃に四、五杯も飲むと満足してしまうんでね、そういうながらグミの実のように赤くなった増田さんは不肖の後輩が咽喉を鳴らしながら配給酒の大半を片付けてしまふのを上気嫌で眺めておられた。増田さんが応召されて二カ月後、社用で東部国境付近へ出張した私は、道すがらパンやチョコレイトを持って穆稜連隊に増田さんを訪ねた。これが、御世話になり通した先輩にたった一度だけ御馳走した私の悲しい思い出である。

昭和三十三年度前期巡検小旅行

六月二十四日から、翌二十五日にかけて、工業の見学をおもな目的として、岐阜・名古屋方面への小旅行をおこなった。

二十四日朝、準急比叡一号に乗車、一行二十四名。岐阜で下車、矢守一彦氏の出迎えをうけ岐阜大の上島正徳・高橋百之阿氏の案内により、尾関次七商店の岐阜提燈の製造を見学。

昼食後、名鉄岐阜線で関市へ向かう。まずガイフを主とする刃物製作の見学。鋼鉄板のプレスから一個のナイフの組立てまで、おのおの別の家の薄暗いせまい仕事場でおこなっている。

次いで同市内のフェザー剃刀の工場へ行く。それ迄の案内工業風の模式とガラリと変った趣きのホートメーション工場で、鋼鉄帯の切断から箱詰まで巧妙な機械のなす流れ作業、工場の規模に比べて、工員の少ないのが目につく。当初の予定では関から汽車で太田まで出て、日本ラインを下る予定であったが、時

間がなく、名鉄バスで大山へ直行する。約四分の名古屋行電車の待時間を利用して大山城の見学、眼下にひらける木曽川の清冽な流がすがすがしい。六時すぎ大山発、名鉄西部本線で名古屋に入り、七時半、宿舎玉山荘につく。松井武敏・喜多村俊夫・水野元・井関弘太郎・高辻幸一氏の出迎えを受け歓談。

翌二十五日、松井武敏・矢守一彦阿氏の案内で瀬戸市へ向かう。瀬戸市で井関弘太郎氏と同道、陶器人形の製造場を見学する。ここから陶土やガラス原料を採る飯野へ向かう。飯野藤岡鉱山の採土場や、陶土を粉碎精製して珪粉・陶土にする工場を見学する。この労働力は近在の余剰労働に依存し、大部分がオートバイを通勤に利用しているのも土地柄である。昼食後、名鉄バスで挙母へ。

挙母でトヨタ自動車の工場を見学。近代的な大工場で見学者の取扱いはソツがない。ここで流れ作業によって、鉄板から完

成品までの自動車製造の工程を見る。

工場見学後、カルピスのサービスとオモチャの自動車のお土産を受け、にわかに降り出した雨のなかを、名古屋に向かつてこの旅行を終えた。わずか二日の間にきわめて能率的な見学を行い得たのはまったく松井武敏氏はじめ名大地理教室の諸氏の御好意によるもので、ここに改めて謝意を表する。

昭和三十三年度巡検旅行

早春、三月に行われたこの旅行は温暖な静岡県東部沿海地方をフィールドとして選んだ。

三月十四日夜、急行「月光」号で京都駅を出発。翌十五日早朝、清水駅に下車して、ただちに三保の松原に向かい、清水駅前に引返して朝食。次いで日本平から、久能山に行く。イチゴの味覚が印象にのこる。昼頃、静岡に出て、細井淳一氏の出迎えをうけ昼食。国鉄で沼津へ出る。直ちにバスで港へ向かい、沼津港より土肥迄航行、百トンの小汽船で海風が冷い。

当夜、土肥温泉で一泊。この日の見学の中心は、温室利用の野菜の促成栽培、茶や石垣梅の栽培など極度に集約的なこの地方の栽培景観であった。ただ、天候不良の為、期待された富士・箱根・天城などの山々の姿が見られなかったのは残念至極。

三月十六日、朝、土肥をバスで出発。伊豆半島の西岸、堂ヶ島で昼食、その間、遊覧船に乗って付近の白色凝灰岩の海蝕洞を見学。伊豆半島を斜めに横断して下田經由石廊崎へ出る。石廊崎は桜のさかり、海蝕台地の先端の灯台で、ちょっとしたカメラコンテストの風景が現出される。石廊崎からふたたびバスで下田へ帰り、下田港や、開港に因む寺院などを見学。夕刻バスで山間の溪谷、湯ヶ野温泉につく。伊豆半島西岸及び東岸の変化に富んだ海岸地形、点綴する漁村及び沿岸漁場、とくに東海岸にいちじるしいエンドウの早期栽培や花卉栽培、あるいは、下田においてみられた観光を名とする商売のたくましさなどは当日の見学から得た収穫と反省とであった。

三月十七日、好天に恵まれたこの旅行も湯ヶ野にて朝解散、一行は三々五々、東京や箱根、韭山などへわかれ散った。参加者は織田教授・末尾・浮田助手以下十九名であった。

卒業生予餞会

三月一日(土)午後一時半より行われた卒業論文発表会の終了後、六時から四条河原町上ル ビヤホール・ミュンヘンに教官・先輩・在学生等四十六名あいつどい、新卒業生の前途を祝福して乾杯、八時過、盛会裡に散会した。

なお、新卒業生のうち、梅宮よりよ君は京都華頂女子高校、藤沢美由子君は大阪相愛高校、平松弘之君は大阪星光学院高校に就職された。また、小野菊雄・坂本英夫・成田孝三の三君は大学院修士課程へ、本年度、修士課程を終えられた高橋正君は大学院博士課程へ進まれた。

大学院(旧制)特別研究生の後期をこのたび終えられた矢守一彦君は名古屋大学文学部助手として四月一日赴任された。

海外出張

藤岡謙二郎氏 在外研究員としてロンドンに滞在中。十二月初御帰朝の予定。

村松 繁樹氏 ベルギーで行われる国際都市学会出席のため渡欧中。九月御帰朝の予定。

川喜田二郎氏 ネパール地方の人類学・民族学・生物学調査のため出張中。今秋御帰朝の予定。

岩田 慶治氏 ライスエクスペディションの一員としてタイ・インドシナ方面への出張を終えられ、六月御帰朝。

住所変更

浅 若 晃
宮 川 善 造
古 沢 三 郎
三 友 国 五 郎
米 倉 二 郎
別 技 篤 彦
岩 尾 常 善
川 上 健 三
野 沢 浩

新入生歓迎会

本会では五月十一日(日)・ミュンヘンにおいて、本年度より地理学関係科目に出講される農学部本岡武助教授、日仏学館A・ブリュネ教授の歓迎を兼ねて新入生歓迎会を行なった。おりからの降雨にもかかわらず、参加者は四十三名、こどもも立って感想をのべ、新入生のなかからも、南米進出の希望など気宇壮大な意見も出て、盛会裡に終了した。

なお、新入生の氏名ならびに出身校は次のとおりである。

〔学部〕 応地利明(高津高)・酒井敏明(鴨沂高)・中村文雄(高津高)・林俊正(鹿児島国分高)・丹場正富(和歌山吉備高)

〔聴講生〕 安見美子(奈良女子大理学部)

〔研修生〕 荒木暉治(現京都市立堀川高校教諭)

近 藤 忠
御 子 榮 幸 一
藪 内 芳 彦
西 井 敏 衛
村 井 敏 衛
杉 村 正 治 郎
伊 藤 孝 夫
柴 田 孝 夫
川 上 喜 代 四
岡 本 啓 志
河 野 通 博
堀 川 侃
川 喜 田 二 郎
小 池 洋 一
松 田 信
林 正 巳
水 野 元
大 西 青 二
若 山 豊 治
高 村 正 雄
井 関 弘 太 郎

木 地 節 郎
勝 目 忍
由 比 浜 省 吾
伊 藤 伸 之
木 下 良
矢 守 一 彦
立 入 哲
水 田 昭 夫
藤 森 勉
高 辻 幸 一
高 本 正
服 部 昌 之
氷 見 方 治
横 田 実
池 上 一 誠
大 槻 守
平 松 弘 之

おねがい・おしらせ

◇……ただいま京大では全学的な図書整理を行なっておりまして、お手元の長期貸出中の図書は、至急御返却下さい。

◇……かねてからおねがいしておりました談話会費の件、未納の方はできるだけ早く御納入下さい。

◇……去る五月、京大以文会の会員名簿が作成されましたので本年は談話会では名簿の発刊を見合わせる予定です。

◇……編集後記

なにぶん不馴れたため、会報の編集にはずいぶんとまどいましたが、ようやくこのような体裁にまとめあげることができました。酷暑のなかを、煩をいとわず御寄稿下さいました太田・山口両氏にあつく御礼を申し上げます。なお編集に関する皆様の御意見を係あてお聞かせいただければ幸甚に存じます。この会報がお手許にとどくのは涼風の立つ頃かと思えます。皆様の御健勝を急じます。

(押野記)